

故藤井先生の御逝去を悼んで

平井昌也

今年、平成6年2月24日、一つの灯が消えた。それは、右も左も分からずこの世界に飛び込んだ私を遠くから導いてくれる、力強い光彩を放つ明かりだった。

藤井先生と私の最初の出会いは僅か2年逆上るだけで済むのですが、にも関わらず、先生から多くのことを直接的、間接的に教わりました。

私は一昨年(平成5年)の4月から先生の授業を受け始めたのですが、6月に入って間もなく、御病気のため、授業は中断されました。それは手術を要するものであったので、夏期休暇いっぱいまで静養されることになりましたが、皮肉にもその年の夏は先生がドイツを訪れる計画を立てておられた夏でもありました。夏休みが過ぎて再開された授業の始業前に、私が延期されることになってしまったドイツ旅行の話題に触れた折り、先生は残念そうに微笑んでおられましたが、その時には、まさか二度とドイツを訪れることが出来なくなってしまうとは、思っておられなかったのではないのでしょうか。そして、この最初の休講を機に、進行しつつある病は先生に何度も授業の中断を余儀なくさせ、結局、その1年後には担当授業から外れることを決断させたのです。

そういうわけで、私が受けることのできた授業は多くはないのですが、反面それだけに一つ一つの授業時間が貴重な思い出になっています。ヘッセの書簡集を題材に扱った授業は、先生の御性質を映し出してか、終始穏やかな雰囲気の中で行われていました。とは申しませんが、それが直ぐ慣れ合いを意味するのではなく、こちらの下調べの不十分な個所は看過されることなく指摘され、決していい加減に済まされることはありませんでした。或るとき、ヘッセの書簡中にたった2行の詩が引用されていたのです。

が、先生はそれをいともたやすくシラーの手によるものであると言い当てられ、その時、僅かな引用からだけでは出典を判別できないと考えてよく調べもしなかった私は、自分の姿勢の甘さに恥じ入りもし、また先生の知識のストックに驚嘆の念を抱かせられもしました。

振り返れば、私は授業を介して単に学問的なことに留まらず、学問に対する真摯な姿勢をも学ばされたように思えます。

他界された翌月、先生が使用されていた研究室の整理をお手伝いしていたときのこと、沢山の書物の中で、背表紙に「死」という文字の刻まれた本が数冊あるのに目を引かれました。それ以来折りに触れては、私の頭に「先生は死期を感じた後、あのような本を読むとここで何かを悟ろうとされたのか、それとも悟りを開かれていたがゆえに死と向き合おうとされたのか」という疑問が湧き上がり、ぼんやりと解決のない糸を手繰り寄せていました。

それから数か月を経た夏の盛り、御仏前に参らせていただくとお宅を訪問いたしました際に、奥様より亡くなる前の御様子についてお話を伺うことができたのですが、その機会に期せずして、先の私の疑問に対する答えを見つけることができたのです。その時のお話によりますと、藤井先生は担当医師から癌の告知を受けても、静かに「そうか」とお答えになっただけで、その後も泰然自若として決して取り乱すことなく、穏やかなままに人生を全うされ、その姿に医師や看護婦は驚かされたそうです。やはり、先生は悟りから自然体で自己の死を受け入れられたのか——と思いがら聞いていた私に、その後につけられた奥様のお言葉は意外なものでした。「主人は最後まで生きなかったようです」。つまり、最後まで生きることと情熱を持ち続けておられた先生は、私が思っていたようには決して自ら進んで死を受け入れられたのではなかったのです。それでは、どうして迫り来る死に対して平静でいることがお出来になったのでしょうか。この新たに生じた疑問の答えをここで述べようとは思いません。ただ一つ言えるとするれば、先生は最後の最後まで生きることと前向きでおられたのでしよう。

その訪問の際、先生は常に何よりも授業を大切にし、必ず出講しようと

なさっていたとも知らされ、退職を前に授業を途中で放棄しなければならなかったことは、さぞ御無念であっただろうと思えてなりません。

今私の手元にある、他界された春に出た関西大学通信に、藤井先生は退職を前にして、——大学を去るに当たって——という題で短文をお寄せになっています。そこで、「長年慣れ親しんだ職場とも、もうお別れだ。少なくともこのようなあり方では、去りたくなかった」とその胸の内を明かされており、続けて、後にする大学に向かって、「関西大学よ、これからも発展を続けて欲しい。しかし重ねて言うが、真の発展は、中で働く人々にかかっている」と呼びかけられ、さらにその発展のためには、「円滑な人と人との関係、本当の意味での共同研究」が必要である、と説いておられます。一人よがりになりがちで、昔ながらの個人研究の閉鎖性と限界、それに対置されて、人と人との繋がりの大切さと互いの切磋琢磨から生まれる相互発展の可能性、そのようなことを行間から読み取らずにはいられません。

藤井先生、長い研究生生活の最後のほんの短い年月を御一緒させて頂いただけでしたが、私は自分が先生の教えを受けることのできた最後の者であり得たことを誇りに思い、そしてまた、後進に託された先生の御意志をしっかり心に刻んで、成長していかなければならないと感じております。

突然、灯台の明かりが消えてしまったことに戸惑いを隠すことはできませんが、今後は道標となる星となって見守っててください。

先生の御冥福を、心からお祈りいたします。

最後になってしまいましたが、藤井先生が所有されていた多くの本を、役立ててくださいとおっしゃって、大学院生の研究室に寄贈して下さいました奥様に、この場をお借りし、院生一同を代表して御礼を申し上げます。計り知れない悲しみの淵にあっても、人への心遣いを忘れない御人柄に、ただただ頭が下がる思いです。本当に有り難うございました。